生徒の主体的参加を促す「考え，議論する」道徳教育プログラムの開発(3)

担当者（代表者）宇佐美公生*，室井麗子*，佐々木淑乃**，木村義輝**
*岩手大学教育学部，**岩手大学教育学部附属中学校

（令和２年３月４日受理）

Ⅰ．はじめに

本研究は，教科化された「特別の教科　道徳」の授業実践に「考え，議論する」要素を盛り込みながら，いかにして生徒の主体的参加を促すことができるかを主目的として一昨年から継続されている研究であり，本年度も中学校での道徳の授業実践を通して開発されたプログラムの意義及びその成果と課題を検討した。

昨年度の研究では，生徒たちの多面的で多角的な思考を促しつつ，道徳的諸価値の理解にも資する実践の試みとして，複数の時間をユニット化することで，複数の内容項目を包み込みつつ，統合的なテーマのもとで全体を振り返り，生徒各自の思考の深まりを促すというプログラムについて検討した。生徒たちには，複数の内容項目を関連させて，それぞれの意義を多面的・多角的に考えさせたり，複数週にわたって継続的・総合的に考えさせることで，思考の深まりが見られることを確認することができた。今年度は，この試みの範囲を広げ，小単元ユニットを組み合わせた大単元ユニットとして年間の計画を組み，さらに小単元ユニットを通した振り返りの可視化を図ることで，学びの変容を教師が把握できるだけでなく，生徒自身が自覚化を促すと共に，有意義な評価の可能性を開くことを試みている。以下のⅡは，そうした中学校での実践の記録とその成果，そして課題についての考察である。

Ⅱ．実践編：「考え，議論する道徳」の授業――中学校における実践

昨年度，岩手大学教育学部附属中学校では，「考え，議論する道徳」の実現に向け，「小単元的ユニットを位置付けたカリキュラム・マネジメント」の側面から，実践を行った。その成果（○）と課題（▲）は以下の４点である。

○毎時間の学習シートなどを通して，内容項目に近付く姿や変容を見取り，還すことができた。それらの内容を基に，授業終わりや休み時間などに，道徳の時間の発言や記述について生徒と会話する時間を持つことができた。

○小単元的ユニットを組むことで，前時の学習シートを見返しながら，複数の授業を跨いで議論が展開される場面も見られ，引き出せる考え方，起こせる変化があることを実感することができた。実態に即した小単元の設定は今後も継続したい。

▲一単位時間の始めに，全体で内容項目について焦点化して理解を図る必要があるかどうかが曖昧である。

▲小単元の質，発達段階，他教科との関わり等，実態に即した効果的な小単元を，年間計画として組み込んでいきたい。

これらを受け，今年度は「小単元的プログラム（パッケージ型ユニット）を位置付けたカリキュラム・マネジメント」に加え，年間計画の見直しと，一単位時間の授業構想の側面から実践を行った。

（１）ねらいと具体的な手立て

本校道徳科では，価値観が多様になる現代だからこそ，何が問題かを道徳的諸価値についての理解を基に判断し，自己を見つめ，他者と議論し，物事を多面的・多角的に考え，人としてのよりよい生き方を主体的に判断し自己決定していく姿勢を育むことが大切であり，そうした道徳科の授業を積み重ねることで，道徳科で目指す資質・能力（道徳性）の育成につながると考えた。以上のことから本校道徳科で育成を目指す資質・能力（道

徳性）を次のように設定した。

【育成を目指す資質・能力（道徳性）】
①道徳的諸価値が大切なことなどを理解し，様々な状況下において人間としてどのように対処することが望まれるか判断する力（思考力等）
＝道徳的な判断力

②自己を見つめ，他者と協働し，物事を広い視野から多面的・多角的に考える力（協調性等）

③自己の生き方についての考えを深め，人としてよりよく生きようと探究する力（主体性等）
＝道徳的な心情，実践意欲と態度

この資質・能力の育成に向け，以下の三つの手立てを今年度の研究の視点として行った。

手立て１　本校のカリキュラムに即した年間計画（重点項目，ユニット）に沿った授業

① 年間 35 時間の道徳科授業を大単元，つまりユニットとして捉える。
② 学期ごと，節目ごとに自校の道徳的実態や道徳教育重点目標に照らして重点的指導内容を明らかにする。
③ 年間指導計画に小単元プログラム（パッケージ型ユニット）を組み込む。

※以下，③を「ユニット」と表記する。

ユニットを組むことにより，様々な内容項目の資料を用いて，数週に渡り連続的な指導を行うことで，多面的・多角的なアプローチの仕方が可能となる。その結果，様々な道徳的価値に関わる考え方や感じ方を統合し，生徒に新たな考え方，感じ方を生み出すことができると考えた。

例として，**表１**に示す通り，３学年「よりよい生き方」をテーマとする場合，６月に行われる学習旅行での学びと関連付けるために，以下のようにユニットを組んだ。

ユニット名	各教科・領域等、行事との関連	重点指導内容
ユニット1　よりよく生きるとは？	HS（学習旅行）	D(22)よりよく生きる喜び
ユニット2　仲間の考え方生き方を尊重する	特別活動（文化祭）	C(9)相互理解，寛容
ユニット3　生命の尊さ、ありがたさについて考える	復興教育　卒業式	B(6)思いやり，感謝　(D(19)生命の尊さ

【表１　ユニット型授業の年間計画への位置づけ】

今年度の学習旅行のテーマは「新しい社会に生きるとは」であり，魅力的な生き方をしている方々にインタビューをしたり，講演を聞いたり，体験学習を通して学んでいく。学習旅行に行くにあたり，道徳科では，【Ａ（１）自主・自律】，【Ｃ（11）公正，公平，社会主義】といった内容項目の資料も組み入れながら，【Ｄ(22)よりよく生きる喜び】について考えていく。その後の，学習旅行や総合的な学習の時間での学びを経て，道徳科で考えたことが，より深まることにもつながるのではないかと考える。

手立て２　一単位時間における学習指導過程の工夫

「考える道徳への転換に向けたワーキンググループにおける審議の取りまとめ」では，道徳科における「見方・考え方」を，道徳科の目標から「様々な事象を，道徳的諸価値の理解を基に自己との関わりで広い視野から多面的・多角的に捉え，人間としての生き方について考えること」と示している。これを基に本校道徳科では，一単位時間における学習指導過程を以下のように整理した。

① 道徳的諸価値について考えること
② 自己を見つめること
③ 人間としての生き方についての考えを深めること
※ 物事を広い視野から多面的・多角的に考えること

これらを一単位時間に組み入れたモデルが，別紙資料１である。このような学習指導過程を踏むことで，理想論だけの話し合いや，単に資料の登場人物への自己の投影をすることで自分自身を見つめたこととしてしまう授業ではなく，人として望ましい生き方を基に自分自身を見つめ直したり，ある事象について判断する経験を積み重ねたりすることで，道徳性を育成することにつながる授業となるのではないかと考えた。

手立て３　ユニットを通した振り返りによる学びの変容の見取りと評価

ユニット（詳細は前述）における自身の考えの変容や深まり，その要因や過程などを自分自身で

気付くことができるようにするため，また，それを教師の見取りに活用するため，振り返りシートを用いる。

ユニットとして行う授業では，一単位時間ごとの振り返りを一枚のシートに書きまとめていく。そうすることで，ユニットの中で考えたことを，ひと目で分かるようにすることができる。さらに，ユニットの最初の授業と最後の授業では同じ問いで振り返りを書かせることにより，ユニットを通した考えの変容や深まりを，生徒が自覚することができ，さらに，教師も見取ることができると考える。この学びの深まりを以下の視点で見取った。

① 生徒が一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているかどうか。
② 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかどうか。

このような振り返りシートをもとに生徒を励ます個人内評価を通知表へ記述することにより，生徒や保護者に還していく。また，毎時間の積み重ねによって見えてくる傾向や変化を捉え，教師側の授業改善の材料としても活用する。

（２）実践の内容

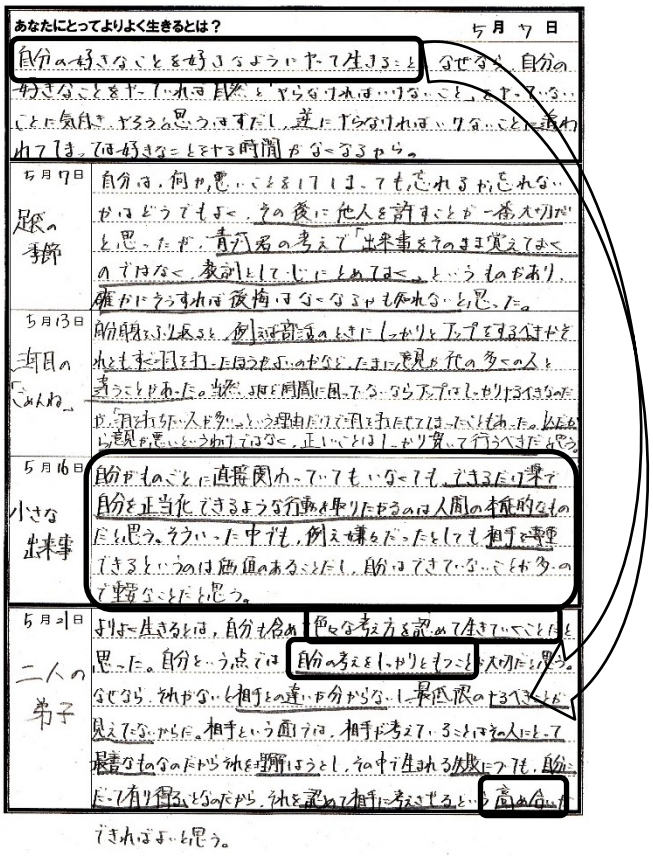
①実践Ⅰ：３年『よりよく生きるとは』の四時間構成

一時間目『足袋の季節』
【D (22) よりよく生きる喜び】
二時間目『３年目のごめんね』
【A (1) 自主, 自律, 自由と責任】
三時間目『小さな出来事』
【C (11) 公正, 公平, 社会主義】
四時間目『足袋の季節』
【D (22) よりよく生きる喜び】

「よりよく生きるとは」をテーマとし３つの内容項目の学習を四時間で構成したユニットである。『中学校学習指導要領解説道徳編』のＤ［**主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること**］から，【**(22) よりよく生きる喜び**】をユニットの最初と最後に学習する。その間に生徒の【生き方の目標】（今年度の道徳の授業の最初で書いたもの）で多く挙げられた，Ａ［**主として自分自身に関すること**］から，【**（１）自主・自律，自由と責任**】また，Ｃ［**主として集団や社会との関わりに関すること**］から，【**(11) 公正，公平，社会主義**】についての題材を加えることで，一つのテーマについて，多面的・多角的に考え，深めさせていくことをねらいとした。

理想の姿について，頭では分かっていても，どうしたら良いか分からない，また，なかなか理想通りには行動できずにいるという生徒が多い。中学校生活の集大成を迎えた今年度は，「こうありたい」という生徒の思いを基に，皆で話し合い，考えながら，自分の夢や目標に向かって失敗しても前向きに行動していこうとする生徒の育成を目指し，生徒自身の思いに即した三つの内容項目を相互に関連づけながら学習することを考えた。以下に，四時間に渡る生徒Ｃの振り返りの記述と，教師が行った評価の例を示す。

ユニット１「よりよく生きるとは？」振り返りシート


あなたにとってよりよく生きるとは？　５月７日

自分の好きなことを好きなようにやって生きること。なぜなら，自分の好きなことをやっていれば自然とやらなければいけないことも，やっていることに気付きやすいと思うからですし，逆にやらなければいけないことに追われてしまっては好きなことをする時間がなくなるから。

５月７日　足袋の季節
自分は，何か悪いことをしてしまっても忘れるか忘れないかはどうでもよく，その後に他人を許すことが一番大切だと思ったが，青木君の考えで「出来事をそのまま覚えておくのではなく，教訓として心にとめておく」というものがあり，確かにそうすれば後悔はなくなるかもしれないと思った。

５月13日　三年目のごめんね
自分自身を振り返ると，例えば前日のときにしっかりとアップをするべきだったのに，用事を済ませたほうがよいのかなと，たまに意見が代の多くの人と違うことがあった。自分は周囲に囲まれているから，アップをしっかりやっていなかったが，「用事が大事」という理由だけで用事を済ませてしまったこともあった。しかたに親が悪いというわけではなく，正しいことはしっかり覚えて行こうと思う。

５月16日　小さな出来事
自分がものごとに直接関わっていてもいなくても，できるだけ早く自分を正当化できるような行動を取りたがるのは人間の本能的なものだと思う。そういった中でも，例え嫌なことだったとしても相手を尊重できるというのは価値のあることだし，自分はできていないことが多いので大切なことだと思う。

５月21日　二人の弟子
よりよく生きるとは，自分も含めて色々な考え方を認めて生きていくことだと思った。自分という点では自分の考えをしっかりもつことは大切だと思う。なぜなら，それがないと相手との違いが分からないし，最低限のやるべきことが見えてこないからだ。相手という面では，相手が考えていることはその人にとって最善なものなのだから，それを尊重しようとし，その中で生まれる欠点についても，自分にとって有り得ることなのだから，それを認めて相手に考えさせるという高め合いができればよいと思う。

ａよりよく生きることについて，「自分の好きなことを好きなようにやる」と考えていましたが，ユニットの学習を通し，「自分の考えをしっかりともち，色々な考え方を認め，高め合う大切さ」にも気付くなど，考えを深めました。特に，ｂ『小さな出来事』の学習では，「できるだけ楽で自分を正当化できるような行動をとりたがってしまうが，相手を尊重できることが今の自分に重要だ」と振り返り，自らの行動を改善していこうと意欲を高めていました。
（206 文字）

ａの記述：評価の視点①　ｂの記述：評価の視点②

【図１　３学年ユニット振り返りシート】

②実践Ⅱ　２年『働くとは』の四時間構成

一時間目『夢を求めてパラリンピック』
【Ａ(4)希望と勇気，克己と強い意志】

二時間目『スカイツリーにかけた夢』
【Ａ(5)真理の探究，創造】

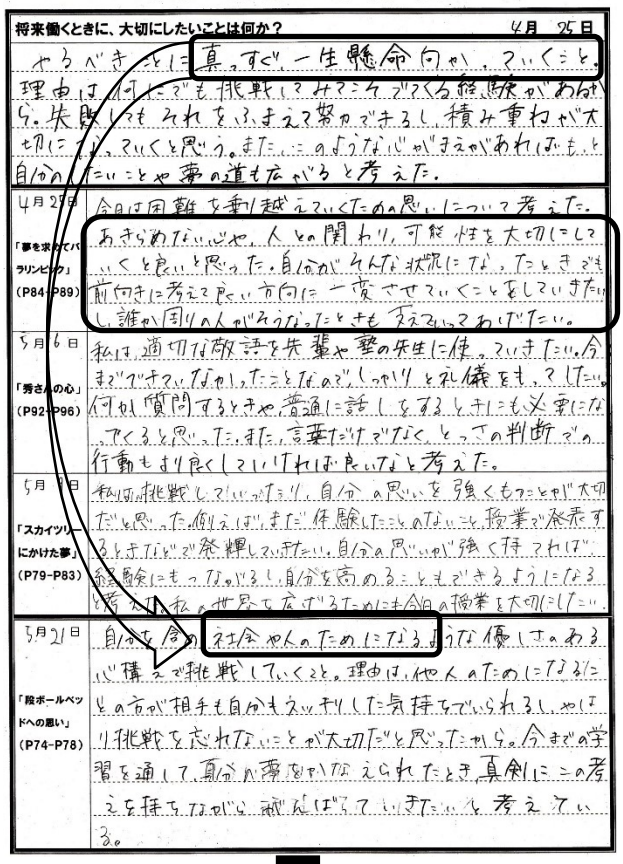
三時間目『秀さんの心』　【Ｂ(7)礼儀】

四時間目『段ボールベッドへの思い』
【Ｃ(13)勤労】

「働くとは」をテーマとした，４つの内容項目の学習を四時間で構成したユニットである。『中学校学習指導要領解説道徳編』のＡ［**主として自分自身に関すること**］から，**【（４）希望と勇気，克己と強い意志】**，**【（５）真理の探究，創造】**について学習する。また，Ｂ［**主として人の関わりに関すること**］から，**【（７）礼儀】**について学習したのち，Ｃ［**主として集団や社会との関わりに関すること**］から，**【(13)勤労】**についての題材を加えることで，一つのテーマについて，多面的・多角的に考え，深めさせていく。

ユニットの学習前に，「将来働くときに，大切にしたいことは何か」という質問に対して，自由に記述させた。その結果，多くの生徒が，働く際の自分の気持ちの在り方や，人とどのように接していくかという視点に留まっていることが分かった。当然，これらの考えも大切であるが，働くことによって社会に貢献し，その喜びによって，より充実した生き方の実現につながるものであるという視点にも気付かせたいと考え，本ユニットを構成した。以下に，四時間に渡る生徒Ｃの振り返りの記述と教師が行った評価の例を示す。

ユニット１「働くとは？」振り返りシート



ａ働くときに大切にしたいことについて，「真っすぐ，一生懸命向かっていくこと」に加え，ユニットの学習を通し，「社会や人のために働くことの大切さ」にも気付くなど，考えを深めました。特に，ｂ『夢を求めてパラリンピック』の学習では，「困難を乗り越えるためには，諦めない心や，人との関わりを大切にし，他者が困難に直面したときに支えてあげたい」と振り返り，実践に向けての意欲を高めていました。（189 文字）

ａの記述：評価の視点①ｂの記述：評価の視点②

【図２　２学年ユニット振り返りシート】

実践Ⅰ・実践Ⅱともに，生徒は，ユニット最終時間の振り返りの際には，学習前に比べ，テーマについての考える視点が増えたことが分かる。また，四時間のうち，より自分事として教材をもとに考えた時間が３時間目だったのではないかと考えられる。ユニット学習とその振り返りにより，一時間単位では生徒自身の考えが広がり，自覚させることができたのではないかと考える。さらに

教師自身も，どのような一単位時間の流れが生徒が自分事として捉えやすい授業となるかを振り返ることができた。

（３）成果と課題

本実践の成果は以下の三点である。

○年間指導計画を立てたことで見通しをもって資料の選択ができるようになった。

○一単位時間の授業の流れのベースを作ったことで，生徒に何を考えさせたいかということや，適切な学習過程について，ねらいを持って授業に臨めるようになった。

○ユニットの振り返りを１枚のワークシートにしたことで，生徒も教師もユニットでの考えの変容などを見取ることができるようになった。また，具体的に生徒に返す評価方法についても考えることができた。

課題は以下の三点である。

①意図的なユニットの構成の検討

昨年度から今年度の研究を通して，ユニットでの学習は，学習の前後で生徒の考えの明らかな内容が見られ，効果的であることは実感できた。ただし，年計によってあらかじめ定め，ねらいを明確にし，担任団で共通理解のもと行う必要がある。また，年間の大きな行事を活用し，道徳での学びを深めるというねらいのもと，ユニットを位置付けるよう検討したい。

②道徳的な見方・考え方を位置付けた一単位時間の授業の工夫

今年度は四つの学習指導過程を一単位時間の流れに位置付けた。しかし，資料や内容項目によって指導過程の流れやどの学習過程に重きをおくかが変わってくることも分かった。ユニット全体で学習指導過程を柔軟に扱えるようにしたい。また，道徳的諸価値の理解を学習過程で全員が通り，考えを深めるための効果的な指導過程を吟味したい。

③学びの自覚化を促す評価の工夫

今年度はユニットにおける学習過程や思考過程が一目で分かるように振り返りシートを作成したが，一単位時間での書く時間の確保が難しいと感じた。そこで，一単位時間の振り返りの効率化を図りながらも，生徒が自己の思考の深まりや，他者の考えの良さへの気づきを具体的に振り返ることができる場面の工夫を行いたい。

Ⅲ．理論編：道徳教育・道徳科における自己評価の可能性

（１）『学習指導要領解説』における児童生徒の「自己評価」と「相互評価」への注目

小学校・中学校の教育課程における道徳の教科化に伴い，「評価」が導入されることになった。『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（平成29年告示）ならびに『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（平成29年告示）では評価の意義および基本的態度・留意点，評価に関する様々な工夫等々が示されているが，ここで注目すべきは，児童生徒による「自己評価」および「相互評価」が学習活動において効果的なものとして取り上げられている点である。例えば，『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』では，次のように記されている。

〔･･･〕児童が行う自己評価や相互評価について，これら自体は児童の学習活動であり，教師が行う評価活動ではないが，児童が自身のよい点や可能性に気付くことを通じ，主体的に学ぶ意欲を高めることなど，学習の在り方を改善していくことに役立つものであり，これらを効果的に活用し学習活動を深めていくことも重要である。（112頁）

従来，学校現場では教育評価の主体は教師であるとの認識が一般的であった。他方，教育評価に関する諸研究においては，学習者自身による自己評価や相互評価活動の重要性が，多くの研究者たちによって，しばしば指摘されている。とりわけ，道徳科の有効な評価方法として期待されている「パフォーマンス評価」や「ポートフォリオ評価法」においては，学習者の自己評価や相互評価は，教育評価活動の主軸の一つとして位置づけられているのである（cf. ハート，西岡ほか）。学習指導

要領解説において，児童生徒の自己評価や相互評価の学習効果が指摘され，効果的な評価の工夫として肯定的に取り上げられていることは，注目に値する。

（２）学習活動における自己評価の方法

では，学習活動における児童生徒の自己評価・相互評価として，具体的にどのような評価方法が有効であろうか。ここでは，自己評価に限定して，以下の２つの評価方法に注目したい。

①ポートフォリオ評価法

まずは，先に挙げた「ポートフォリオ評価法 portfolio assessment」である。「ポートフォリオ portfolio」とは，学習者の作品や自己評価の記録，教師の指導と評価の記録等を，学習者自身がファイルや箱等に系統的に蓄積していきながら作成されたものを指す。ポートフォリオづくりを通して，学習者は自らの学習のあり方について自己評価をするのであり，教師はそれを促しながら，学習者の学習活動と自らの教育活動とを省察しながら評価するのである（cf. ハート，西岡ほか）。

②大村はまの「学習記録」

もうひとつここで注目したいのは，「ことば」の教育の優れた実践者であった大村はまによる「学習記録」作成の実践である。大村は，自らが提案した「単元学習」において，学習者自身に自己の「学習記録」を作成させている。この「学習記録」とは，単元あるいは学期の学習終了段階において，その期間中に作成した様々な学習成果物やメモ・資料等を記録として綴じたものである。大村の教育実践ならびにそれらを支える教育思想を詳細に考察・分析した畠山大によると，大村の教育実践においてこの「学習記録」は，単なる記録ではなく，学習者が自分自身で自らの「新たな学びを生成」し続ける資源となっているという（cf. 畠山）。

以上にみた２つの自己評価の方法は，学習者自身が・学習者同士が，多角的・多面的に，議論し，考える道徳教育・道徳科授業の充実化に寄与するものであると言える。では，これらの自己評価の方法を，道徳教育および道徳科の実践にどのように取り入れ，評価法としてどのように具体化すればよいであろうか。これらの点については，今後の課題として考えていきたい。

Ⅳ．おわりに

「特別の教科　道徳」が導入されるにあたって，教育関係者から寄せられた不安の一つに，評価方法をめぐる不安があった。他の教科と違い道徳科の場合には，評価基準はなく，生徒個々の学習状況や思考の深まりなどを捉え，更なる成長を促す評価記述が求められることになる。そのためにはどのような方法を用いるのがよいかということについて，本研究では幾つかのアイデアが提供されている。その一つはユニット化の中での複数の時間にわたる生徒自身による振り返りの記述を手がかりに，教師がその学習成果や成長の評価に活用する方法である。これと並び，室井は，生徒自身による「自己評価」や「相互評価」の方法をとおして教師が評価を行う可能性を幾つか提案している。それらの方法の更なる検討は，次年度以降に譲るとして，いずれも生徒自身が自らの思考・学習・対話を振り返ることの意義を積極的に活用しようとするものである。

ところで，ユニット化の試みは，生徒の持続的な思考を促す可能性もあるが，しかしもう一方で生徒たちが主体的に考えれば考えるほど，場合によっては教師側の計画をはみ出る発想や意見が出現する可能性も指摘されていた。

「考える」とは自分で考えることであり，考えさせることではない。しかし一般的な道徳の授業では「ねらい」や「問い」が教師の側から発せられることで，生徒たちは「考えさせられる」ことになる。年間の授業を計画し，取り上げる内容項目を網羅しようとすれば，どうしてもそのようにならざるを得ないことは理解できる。しかし，生徒の更なる主体的な参加を促すためには，生徒自身が「問い」，自ら考えようとする機会を設けることも重要であると考える。そしてそのために「子ども哲学対話」の手法が考えられる有効な手段であることを，本研究では過去に提案してきたし，そうした「哲学対話」を取り入れた実践も幾つか

の地域では既に行われている[1)]。次年度以降は，評価のあり方に加え,生徒が自ら「問い」「考える」実践を，これまでの成果を活かしながら、どのようにして実際の授業に組み込むか、その可能性についても検討してみたい。

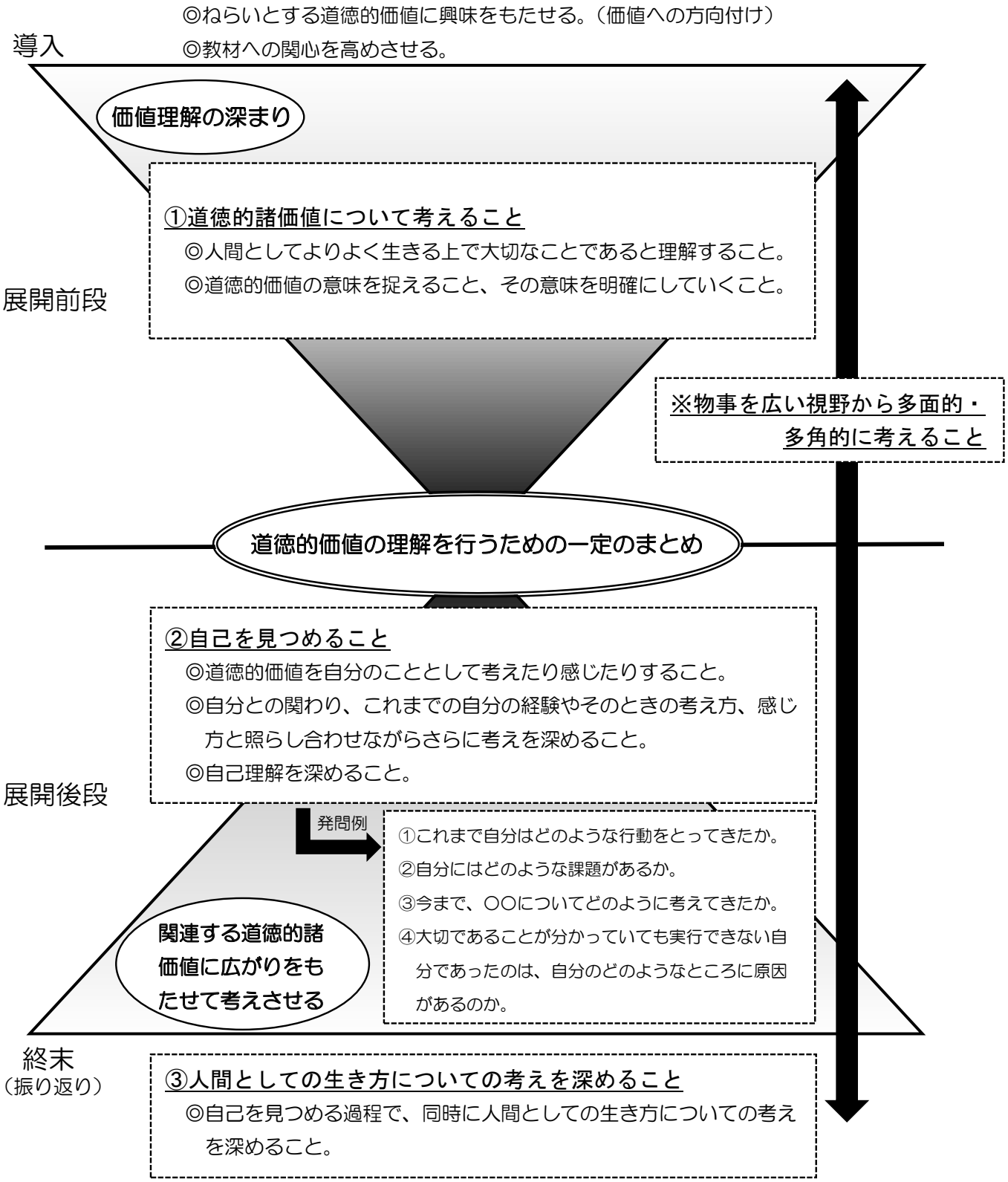
【参考文献】

・Society5.0 に向けた人材育成に係る大臣懇談会（2018)『Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる，学びが変わる』
・田村学（2017)『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社
・赤堀博行（2017)『「特別の教科　道徳」で大切なこと』東洋館出版社
・田沼茂紀（2017)『道徳科授業のつくり方 パッケージ型ユニットでパフォーマンス評価』東洋館出版社
・柳沼良太（2017)『道徳の理論と指導法』図書文化社
・毛内嘉威（2018)『道徳授業の PDCA　指導と評価の一体化で授業を変える』明治図書
・柴原弘志（2018)『岩手県教育センター「『特別な教科　道徳』における授業づくりと評価」』
・柳沼良太（2019)『平成 30 年度 第 35 回岩手県教育評価研究大会「新学習指導要領における道徳教育の在り方」』
・吉本恒幸（2019)『平成 30 年度 第 62 回岩手県教育研究発表会「道徳科の授業と評価」』
・岩手県教育委員会『平成 31 年度　学校教育指導指針』
・「考える道徳への転換に向けたワーキンググループにおける審議の取りまとめ」
・西岡加名恵・石井英真・田中耕治編（2015)『新しい教育評価入門―人と育てる評価のために』有斐閣
・畠山大（2017)「「ことば」の学びにおいて「記録」が持つ意味とは何か―大村はまの「学習記録」とポートフォリオ評価論の比較分析―」熊本哲也・畠山大編『「ことば」と「教育」』(岩手県立大学高等教育推進センター基盤教育部教職部門)
・D・ハート（2012)『パフォーマンス評価入門―「真正の評価」論からの提案』田中耕治監訳，ミネルヴァ書房
・文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』平成 29 年告示，廣済堂あかつき
・野澤令照編（2019)『こどもの問いでつくる道徳科；実践事例集』東京書籍

【注】

１）野澤令照編（2019)『こどもの問いでつくる道徳科；実践事例集』東京書籍，8-9 頁参照。

別紙【資料１】　研究の視点２のイメージ



吉本恒幸（2019）『平成 30 年度 第 62 回岩手県教育研究発表会「道徳科の授業と評価」』を参考に作成